

『日本オーウェル協会・30周年記念論文集』構想発表会

「オーウェルは新左翼にどのように読まれたのか ～中核派を中心として～」

明治大学政治経済学部・西川伸一
nisikawa1116■gmail.com(■→@)

1) 内ゲバの記憶

@1999～2001 革労協(社青同解放派)の内ゲバ

- 1999.5 革労協主流派(狭間派)と反主流派(山田派)に分裂
- 1999.6.4 反主流派幹部が襲われ、瀕死の重傷。
- 1999.7.2 主流派幹部(明大生協理事)が襲われ死亡。
- 1999.7.21 反主流派幹部(明大生協職員)が襲われ2日後に死亡。
- 1999.11.14 主流派幹部が襲われ死亡。
- 2000.2.8 反主流派活動家が襲われ死亡。
- 2000.2.9 その襲撃キャップ(主流派)が襲われ死亡。
- 2000.8.30 反主流派幹部(明大生協従業員組合書記長)が襲われ死亡。
- 2000.11.2 明大学生部長が襲われ重傷。
- 2000.12.12 全学教職員集会→声明「革労協のテロに屈してはならない」
- 2001.1.7 “明大冬の陣”:3地区の学生会館・部室センターを一斉に閉鎖

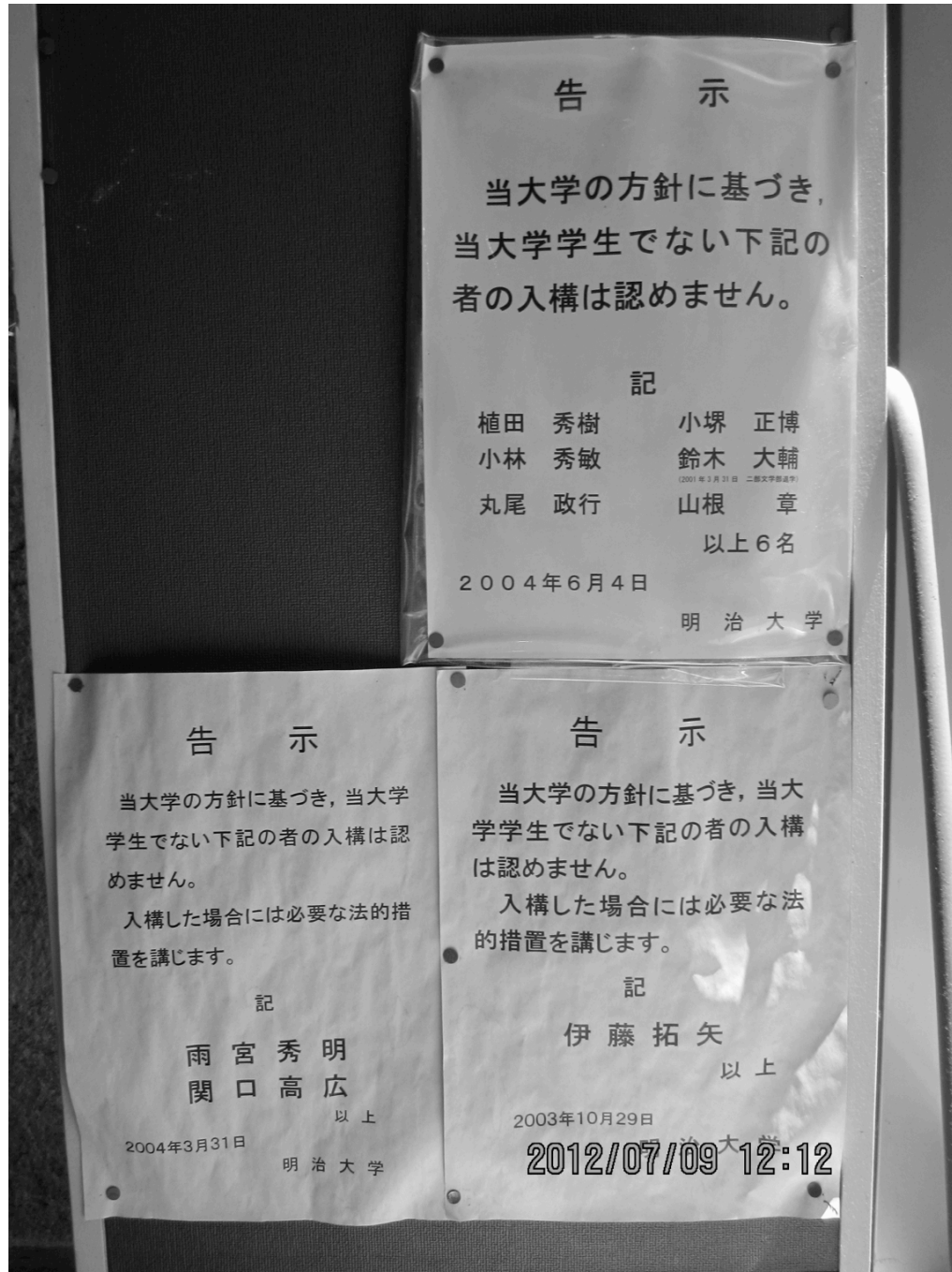
明大教授が襲われ重傷 学園祭絡む？ 東京・品川区

二日午前九時十分ごろ、東京都品川区上大崎一丁目の路上で、「男性がけんかしている」と一〇番通報があった。警視庁大崎署が調べたところ、明治大学の学生部長で経営学部の長尾史郎教授（五九）＝品川区東五反田五丁目＝が、四、五人組の男にバールのようなもので両足を殴られ、骨が折れるなど重傷。明大は、今月一日から開催予定の学園祭を、過激派の革労協とみられる部外者が実権を掌握していることを理由に中止しており、警視庁公安部は大崎署に捜査本部を設置し、関連を調べている。

調べによると、男たちは長尾教授を殴りつけた後、茶色の車に乗って逃げたという。この車とみられる盗難車が、現場から二キロ離れた目黒区内の駐車場で午前十時二十分ごろ、時限式発火装置によって全焼していた。

明治大広報部によると、長尾教授は四年前から学園祭を統括する学生部長を務めている。大学側は、学園祭を中止した理由について「内ゲバ事件が相次いでいる革労協とみられる部外者が（学園祭実行委員会の）実権を掌握している異様な状態で、学生諸君の自主的な祭典ではない」などと説明している。『朝日新聞』2001.11.2

明大の校舎入り口にある「告示」
2012年7月9日撮影。



毎休み時間に流れる構内放
送:「こちらは明治大学です...
政治セクト等の勧誘活動が報
告されています。これらの団体
は巧妙な勧誘マニュアルをも
ち、親切そうに近寄ってきます。
...個人情報管理には十分注
意して下さい」

2)『カタロニア讃歌』翻訳刊行史

	刊行年	翻訳者	出版社	備考
1	1962	橋口稔	筑摩書房	『世界ノンフィクション全集』第37巻
2	1966	鈴木隆・山内明	現代思潮社	
3	1970	橋口稔	筑摩書房	筑摩叢書
4	1972	橋口稔	筑摩書房	『ノンフィクション全集』第24巻
5	1975	高畠文夫	角川書店	角川文庫
6	1978	鈴木隆・山内明	現代思潮社	
7	1979	新庄哲夫	学習研究社	『世界文学全集』第50巻
8	1984	新庄哲夫	ハヤカワ書房	ハヤカワ文庫
9	1992	都築忠七	岩波書店	岩波文庫
10	2002	橋口稔	筑摩書房	ちくま学芸文庫
11	2008	鈴木隆・山内明	現代思潮新社	

NLD-OPACの検索による。

@現代思潮(新)社

1957年に石井恭二が創業、セクトとは独立した新左翼系出版社。
新左翼系の思想書籍をはじめ埴谷雄高、吉本隆明、武井昭夫、澁澤龍彦、ドイツやフランスの哲学などの著作を刊行した。

『トロッキー選集』第1期・第2期を刊行。

1996(7?)年に石井が経営を離れる。1997年に倒産。2000年に現代思潮新社と名称を改めた。

現代思潮社創業の石井恭二さん死去 「悪徳の栄え」刊行

石井恭二さん(いしい・きょうじ=現代思潮社元社主)が11月29日、乳頭部がんのため死去、83歳。告別式は2日正午から東京都台東区東上野6の18の4の長泉寺で。喪主は妻満由美さん。

1957年に出版社、現代思潮社(現・現代思潮新社)を創業し社主・編集主幹として活動。59年、サド著「悪徳の栄え」を刊行した際に、わいせつ文書として発禁処分を受け、訳者の澁澤龍彦とともに起訴されて罰金刑を受けた。著書に「正法眼蔵の世界」など。『朝日新聞』2011.12.1夕刊

革マル派の最高指導者・黒田寛一(1927-2006)の妹・和子が引き継ぐ。

＝現在は革マル派に近い。

3)『前進』に掲載された『カタロニア讃歌』書評

@『前進』 中核派の週刊機関紙・毎週月曜日発行、4頁建
287号(1966.6.6)「新刊旧刊」欄に現代思潮社版の書評掲載



ジョージ・オーウェル著(鈴木隆・山内朋訳)

カタロニア讃歌

評者・野島三郎
 (本名:木下たかあき)
 中核派政治局員
 中心的理論家
 「スペイン革命の教訓—帝国主義の危機を救済したスターリン主義反革命」(1)-(3)を「木下たかあき」名で執筆。

- (1)416(1969.1.6)号
- (2)417(1969.1.13)号
- (3)418(1969.1.20)号



邦訳版のキャプション「アラゴン戦線にて政府軍の反乱軍阻止を助ける若い娘たち」

@書評の内容分析

①全体的な評価:「オーウェルのこの従軍記はスペイン革命の崩壊をまのあたりに見、参加したものの貴重な証言をなしている。」

②把握の構図:「人民戦線政府とスターリニストの側、CNTとPOUMに代表される労働者の側」

→中核派「反スターリン主義の旗の下」

③バルセロナ電話局事件について:

「蜂起とは攻撃的行動と明確な行動を意味する」(現代思潮社版145頁)というそうした蜂起にはならなかった。このことは、起りうべくして起った誰もが予想していた攻撃に対して労働者はその行動によって革命的意図を体現したにもかかわらずその頭脳と意識を欠いていた、ということの意味するのである。／労働者階級の自己意識はただ革命的組織を媒介にすることによって、階級の相対的に独立した部分としての革命党を頭脳とすることによってのみ可能なのである。POUMは労働者階級のそうした革命的意図を体現することに失敗し」

☆「革命的組織」「革命党」→中核派を暗示

④『カタロニア讃歌』の限界の指摘：

「オーウェルは五月事件が「ファシストのスパイ」であったPOUMによる「反革命蜂起」というスターリニストとブルジョアジーの喧伝に対する詳細な反論を展開している。〔中略〕むしろそうしたスターリニズムの欺瞞と非倫理性が、その反革命性の一表現であることこそあきらかにし、POUMとCNTがそうした反革命と闘うこともそれに耐えることもできずに敗退したのが何故なのかをあきらかにすることこそ必要なのである。その意味では『カタロニア讃歌』は限界をもっている。」 ☆「反スタ」の強調

⑤現代への教訓：

「この党派的な立場こそ実に彼の従軍記を証言としても文学としても貴重なすぐれたものとしている〔中略〕このアクチュアルな証言を通してわれわれは勝利的革命への可能性をはらむいろいろな批判的契機を、またPOUMの実態などを教訓的に学ぶことができるのである。とくにスターリン主義に対する立場と党のための闘争をめぐる問題という現在のなその点で豊かな教訓をひきだすことができる。」

☆「党のための闘争をめぐる問題」？

4) 反スタが『動物農場』にたどりつかない理由

@オーウェル「『動物農場』ウクライナ語版のための序文」

「社会主義運動の再生をわたしたちが望むのであれば、ソヴィエト神話を破壊するのが肝心であるという確信を、この十年のあいだにわたしは強めてきたのである。／スペインからもどったわたしは、ほとんどだれにでも簡単に理解できて、多国語に簡単に翻訳できるような物語のかたちでソヴィエト神話を暴露することを考えた。」(215-216頁)

@高畠文夫『動物農場』解説

「いざ出版という段になると、はたとゆきづまってしまった。四つもの出版社から出版を断られてしまったのである。〔中略〕『動物農場』が、あまりに、痛烈な、スターリン独裁下のソビエトに対する攻撃であったからだった。」(246頁)

☆野島書評にオーウェルの他の著作への言及はいっさいない。

→反スターリン主義を掲げているのになぜか。

@梅本克己「何を革命するのか」

「内ゲバの犠牲者がまた一人出てしまった〈一九七〇年八月四日〉。〔中略〕反スターリン主義—この標語によって意図されたものは何だったのだろうか」(569頁)

「今日の学生運動の思想的軸は、そのような粛清の論理を必然的なものにしたスターリン主義からの離脱を目標として出発したのである。〔中略〕その救出作業の帰結がこの内ゲバだとすれば、これはどういうことになるのか。／革命が政治の極限であり、この極限において、政治的行動固有の性格が出るのだとすれば、革命をめざす政治的党派にとっては、スターリン主義からの離脱は不可能ということになる。」(574頁)

『梅本克己著作集』第八巻(三一書房、1977年)

Cf.) 「何を革命するのか」の初出は『朝日ジャーナル』1970年9月6日号。

☆『動物農場』: 反スタを乗り越えて、政治指導部が陥りやすい欠点を鋭く暴いている。→批判が自らに向かう危険なトゲを内包。